

オムニバスドラマ「堺市博物館」

作…ドラマティック堺さがしハンターの中学生のみなさん

（井上綾音、金谷美里、川口真奈美、楠本容子、篠原千幸、

高野綾、高見紗千恵、田中日菜乃、辻本友希乃、東照寺七海、

仲野薫、二木桜子、野村幸子、藤間初穂、山下華加）

まとめ…今井雅子

MⅡモノローグ

TⅡテロップ

○ 堺市博物館・通用口（廊下（真夜中）

真つ暗な通路に光る懐中電灯三つ。

照らしているのは、仲良しオバちゃん三人組の里子、

市子「あっさり開いたな」

和子「開いた開いた」

里子「なんかひんやりしてるな。オバケとか出そうやん」

市子「おるんちやう？ 古いもんばかり置いてるし」

里子「市子ちゃん、もう、怖いこと言わんといて」

和子「声大きい」

市子「オバケのほうか怖がつて逃げてくわ」

里子「あんた、えらい声弾んでへん？」

市子「そら、そうや。夜の博物館でときめく出会いがあるて

占いに書いてあったんやもん」

里子「せやからて、なにもこんな泥棒みたいな真似せんか

っ」

とそのとき、通用口から誰かの声がする。

和子「シート。誰か来るで」

声をひそめ、顔を見合わせる市子たち。

市子「こっちこっち」

と手招きし、里子と和子を呼ぶ。

壁にぴたつとくつつき、気配を消す三人。

中学生の彩華、美月、葉月、美砂が話しながら近づ

いてくる。

彩華「案内簡単に入れましたね」

美月「当たり前じゃん、裏から手回してるんだから」

とそのとき、ショーケースの中の行基が動いて、

行基「よっこらしょ。あ、こんにちは」

T 第一話「行基の事情」

声をかけられ、驚いて立ち止まる中学生たち。

見ると、ショーケースの中の行基がしゃべっている。

驚いた顔で中学生たちを見ている市子。

里子「わ、行基がしゃべった」

和子「シート」

中学生たち、市子たちに気づかず、

彩華「高梨さんの言ったことが本当だったなんて!!」

美月「行基が動くななんて聞いたことなかった!!」

葉月「当たり前」

美砂「高梨の今日の運勢は一位だ」

美月「つまり、でっちあげたと」



行基

行基 「君たちはなんでこんな所にいるんですか？」

葉月 「お前、ハンドルネームは？」

彩華 「行基ですよ。小学校で習いませんでしたか？」

葉月 「実は習いました」

行基 「覚えててくれて光栄です」

美月 「いや、あなたどう見ても行基じゃないでしょ」

行基 「いや、実は深いわけがあつて」

美砂 「聞いてやろう」

行基 「ありがとうございます」

彩華 「いったいどういう事情が……？」

行基 「実は、これが私の本業なんです」

美月 「うわ、語りでした」

行基 「お金がなくなつて……」

葉月 「だから行基」

行基 「このガラスケース内の警備、一晚三千円なんです」

美月 「行基は関係ないんだつてよ、高梨さん」

葉月 「そんなはずは……」

彩華 「でも、行基つて何か持っていたような……？」

美月 「そう、棒みたいなのやつ」

行基 「如意ですか？ あれはダメなんですよ」

葉月 「なぜだ」

行基 「緊張して落としてしまいますから」

美月 「わ、しょうもな」

葉月・彩華・美砂 「(そろつて) しょうもな！」

彩華 「帰りましょう」



美砂「今度、行基を占いに来てやろう」

美月「しょうがない、暇な時に来てあげる」

葉月「さらば！」

行基「あ、さようなら？」

来た道を去って通用口へ向かう中学生たち。

気配を消していた市子たち、壁から離れ、見送る。

里子「今の子らしゃべってたん、何語？」

和子「そら日本語やろ」

里子「わかってるけど。意味不明やな」

和子「中二病いうやつちゃう？」

里子「中二病？」

和子「あのくらいの子らにしかわからんノリがあるんや」

和子、ぼうつとしている市子を見て、

和子「市子ちゃんとこの娘さんも、あのくらいやろ？」

里子「美月ちゃんな？」

市子「あ……うん」

里子「そういや、あの子ら、占いがどうたら言うてへんかった？」

和子「言うてた言うてた」

里子「あの子らも占い見て来たんやろか」

和子「その割に、あっさり帰ったけどな」

里子「親は何してるんや」

市子「……私」

里子・和子「え？」

市子「真ん中におった子、うちの娘」

里子「しよーもなつて行基さんに突っ込んでた子？ あれ美月ちゃん？」

市子「親が夜出歩いたら、ろくなことないな。はよ帰ろ帰ろ」

と行きかけると、目の前に大型埴輪が飛び出す。

里子「うわ、何？」

和子「嘘！ 埴輪が動いてる！」

T 第二話「ハニワールド」

シヨーケースから飛び出した大型埴輪のポチが、

ポチ「ウ……ウウウ。ワオーン!! おいしそうなおいがする！」

と里子のほうへ突進してくる。

里子「わ、私、来る前にステーキ食べてきた。そのにおいち

やう？」

和子「なんでそんなん食べてきたん？」

里子「タイムセールしててん」

ポチ「肉、肉、肉のにおい！」

と里子を追いかける。

里子「やめてやめて。犬苦手！」

と逃げる。

和子「え？ どうなってるん？ あれリモコン？」

市子「さあ……」

困った顔をした埴輪のコマニワが追いかけて、

コマニワ「おーい、ポチー。どこに行くの。待って〜」

逃げる里子。追いかけるポチ。追いかけるコマニワ。



和子「市子ちゃん、写真」

市子「え？」

和子「埴輪が走り回ってるねんで。スクープや。カメラ、はよ」

市子「あ、うん」

あわててスマホを取り出す市子。

和子、奪って撮る、撮る、撮る。

里子「撮ってんと、助けて！」

と、急にポチが立ち止まる。

そこは、火縄銃の火灯（カトウ）のショーケースの前。

火灯に向かって、吠えるポチ。

追いついたコマニワが、息を弾ませて、

コマニワ「ポチっ、どうしたの？」

答えず、吠え続けるポチ。

そこに、兄貴分の埴輪のスケニワが近づき、

スケニワ「どうしたんだ？」

コマニワ「スケニワ兄さん、ポチが……」

吠えるポチと、その先の火縄銃を見るスケニワ。

スケニワ「おや、この火縄銃は……もしかして……。 （火灯

に）あんた、昔、ポチを粉々にした火縄銃か？」

コマニワ「え？ そうなの？」

なおも吠えたてるポチ。

コマニワ、火灯に詰め寄り、

コマニワ「ポチの体を見て。傷だらけでしょ？ あんたが撃



コマニワ



スケニワ

ったせいよ」

火灯「違うんだ！ 確かに撃ったのは私だが、撃つように仕向けたのは人間なんだ！」

コマニワ「え……」

火灯「私だって、撃ちたくて撃ったわけじゃない」

スケニワ・コマニワ「……」

吠え立っていたポチが黙り、火打を見上げる。

火灯「どういう因果か、同じ博物館に納められて、いつか謝

りたいと思っていた」

スケニワ「あんたも苦しんでたってわけか」

コマニワ「どうする？」

とポチを見る。

ポチ、くると巻いたシツポを小さく振る。

コマニワ「ポチ……」

スケニワ「いい子だ」

とポチの頭をなでる。

コマニワ、火打に向き直り、

コマニワ「いいよって」

火灯「ありがとう」

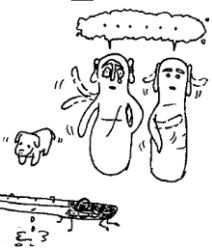
そこに警備員が来る。

警備員「おや、こんなところにあつたのか。誰が動かしたんだ？」

とコマニワを抱き上げようとして、

警備員「……ん？ こんな笑ってたっけ？ もっと困った顔

をしていたような……気のせいかな」



見届けた市子たち。

里子「なんか、ええもん見せてもらたな」

和子「うん」

市子「あかん、娘のこと忘れてた。はよ行かな」

と行きかけると、通用口のほうから懐中電灯の灯りが近づいてくる。

和子「あれ？ また誰か来たで」

T 第三話「GYOKIE、S」

懐中電灯を手に近づいてくる侵入者。

侵入者「警備員は巡回中か…今のうちに高そうなもんを…」

とキョロキョロと周りを見渡す。

男の声「何してんねん？」

侵入者「えっ!? もしかして警備員？」

と振り返ると、すぐ後ろに行基がいる。

侵入者「あー、行基か……」

と一瞬ほつとしてから、

侵入者「ぎゃあー！ー！」

と腰を抜かす。

行基「そんな大きい声出したら、警備員飛んで来るぞ」

侵入者「そ、そうですね……あはは……」

行基「早く立てよ。そんなとこ座つたら風邪ひくぞ」

侵入者「えっ？ あ、ありがとうございます。ところで、ど

うしてこんなとこにいるんですか？ さっきまで誰もいな

かったような……」

行基「まあ、こんなとこじゃなんだし、展示室行こーぜ」

侵入者「は、はい。わかりました。(ブツブツ) ラッキー」

行基「(移動中)とここでお前、何しに来たんや？」

侵入者「えっ、あっ、えくくくく？ あっ！夜の散歩に来たんですよ！」

行基「そうかい。あっ！ 暗いから足もと気を付けろよ」

侵入者が何かにつまづいて、こける。

行基「はく、だから言ったのに、ダサいなー」

警備員の声「今の音は何だ？ また埴輪が逃げたか？」

侵入者「えっ、誰？ やっぱ来ちゃったかく、警備員」

と焦ると、そこに現れたのは埴輪。

行基「おう、ハーニワーじゃないか」

侵入者「ハーニワー？」

ハーニワー「おう、ギョーキー」

行基「久しぶりだな」

ハーニワー「そうだな。っていうか、23時間ぶりぐらいかな？」

二人が立ち話しているすきに、侵入者がごそごそして何かを盗む。

ハーニワー「おい、何してる？」

侵入者「へ？」

ハーニワー「お前、泥棒だろ！」

侵入者「見つかったらまった」

行基「ま、わかってたけど」

ハーニワー「また泳がせたのか？」

行基「余興だよ。こいつが何を盗むか見てみたくてね」

ハーニワー「ギョーキーって人が悪いよな」

行基「イベントがないと退屈でさ」

侵入者「何の話だ？」

行基「運が悪かったな。俺たち、バイトでここの警備やってるんだ」

侵入者「え？」

里子「埴輪の手も借りたい、いうやつ？」

和子「人手不足なんやなー」

ハーニワー「けーびいんさーん、どろぼーですよー！」
侵入者「ちっ」

と盗んだ何かを小脇に抱えて、逃げる。

警備員が駆けつけて、

警備員「待てー」

と追いかける。

行基「あいつが盗んだもの、見た？」

ハーニワー「え？ 何？」

行基「マーちゃん」

ハーニワー「マジ？ よりによって、平成時代のなんちゃって埴輪？」

行基「シロウトだよな」

と笑い合っていると、激しくぶつかり合う音がして、侵入者の声「ギャーッ。埴輪がーっ！」

○ 同・廊下

バラバラになった大型埴輪を前にパニックの侵入者。
侵入者「埴輪がバラバラやーっ。お宝がーっ。せっかく盗ん
だのにーっ」



市子「あれいくらするんやろ？」
和子「弁償させられるんかな」

警備員、慣れた手つきで埴輪をくつつける。

侵入者「え！」

と驚いて涙が引っ込む。

市子「わ、くつついた」

和子「マグネットや」

里子「ようできてるわー」

市子「せや、こんなことしてる場合とちやう。娘、娘」

和子「警備員さんに見つかる前に、はよ出よ」

○ 堺市博物館・前

市子たち三人が出てくると、美月が一人で立っている。
る。

市子「おった、おった。ちょっと美月」

と近づいて、

市子「あなた、こんな夜中に何やってんの？」

美月、振り返らず、

美月「そっちこそ」

市子「あなたも見たんやろ、占い？ 夜の博物館でドキドキする出会いがある、いうやつ？」

美月「まあ、そんなところ」

市子「他の子らは？」

美月「美沙のお母さんが迎えに来た」

和子「ほんで美月ちゃんはお母さん待ってあげたん？」

里子「やさしいなあ」

美月「ちよつと静かにして」

一点を見つめている美月。

視線の先、若い男が行ったり来たりしている。

公務員のヤマモトである。

T 「第四話 駆け落ち」

和子「誰？」

里子「美月ちゃんの知り合い？」

答えず、男をじっと見ている美月。

市子「あんな男やめとき。不審者ちゃうん？」

美月「さつきからあの人、この前をうろろしてるねん」

市子「なんで？」

美月「知らんわ」

市子らに気づかず、ブツブツ言っているヤマモト。

ヤマモト「うーん……ここで入ったら不法侵入……。でも彼女を迎えに行かないと……」

市子「彼女って誰？」

美月「なんでも私に聞かんといて」

胃の声「おい!! そのの怪しいやつ!! 泥棒か!」

里子「誰の声？」

市子「警備員さん？」

美月「静かに」

ヤマモト「え!? ええっ!? ち、違……うこともないか…?」

胃の声「なんだ違うのか」

ヤマモト「あっさり信じた!? っていうかどこにいるんだ…

…?」

胃の声「ここだここ」

と声が近づき、胃（かぶと）が現れる。

和子「胃が歩いてきた」

里子「もう驚かんけど」

ヤマモト「う、うわーっ!! なんだ!? 亡霊!」

胃「違う、違う。俺はただの胃だ」

ヤマモト「胃……? いや、胃がしゃべってもおかしいだろ!?
てか外に出てるし!」

胃「ちよつと風にあたりに来ただけだ。いいじゃねえか」

ヤマモト「いいのかそれ!」

胃、ヤマモトの顔をまじまじと見て、

胃「あ、あんた。誰かと思ったら……」

ヤマモト「え?」

胃「俺だよ俺!!」

ヤマモト「オレオレ詐欺かよ」



胄「ほんとに覚えてない？」

ヤマモト「ごめん」

胄「巫女埴輪の隣の胄だよ」

ヤマモト「ああ、そういや、おったような……」

胄「まったく、巫女しか眼中にないんだな」

ヤマモト「……はい」

胄「照れるなつて。ま、立ち話もなんだし、入れよ」

ヤマモト「え!? いいのか……不法侵入じゃ……?」

胄「いやいや、俺が許可してるんだからいいだろ」

ヤマモト「許してくれるのか、俺たちの仲を？」

胄「は？」

ヤマモト「……俺、実はあの巫女形埴輪と駆け落ちしに来たんだ」

胄「はあ!? お前、まさか、そこまで……」

ヤマモト「ああ、本気なんだ」

胄「……悪いことは言わないからやめといた方がいいぞ」

ヤマモト「……え? なんで? 彼女は俺の理想の女性だ!」

胄「たしかに、黙ってれば、な」

ヤマモト「黙ってれば……?」

胄「まあ、当たって砕けてこいよ」

ヤマモト「砕けるとは決まってるかいよ?」

胄「いや、俺の予想じゃ、お前はボコボコにされるね」

ヤマモト「……行ってくる」

と中へ消える。

市子「どうする?」

和子「そら、ここは当然見届けるやろ？」

とついで行くオバちゃん三人。

美月も後からついて行く。

○ 同・中

ショーケースの中、涼しげな微笑みをたたえた巫女形埴輪。

ヤマモト、その前に進み出て、

ヤマモト「え、えーつと……巫女形埴輪さん……」

巫女「様よ！」

ヤマモト「……へ!?」

巫女「巫女様と呼びなさい!!」

ヤマモト「あ、えつと……巫女様、俺と、その……駆け落ちしてください!!」

しばらくの沈黙があつて、

巫女「嫌よ」

ヤマモト「ええっ!? フ、フラれた……?」

巫女「まあ、この私に目を留めた点については褒めてあげるけど。私はこのこの女王なの!! ここから出るなんて考えられないわ!!」

ヤマモト「そ、そんなあ……」

と膝をがっくり折る。

巫女「だいたい、あなた、ストロークなさすぎ。こっちは悠久のときを生きてるの。いきなり駆け落ちしてくださいっ



て言われてもね。自分の気持ちを急いで伝える男って情緒なすぎ」

ヤマモト「巫女様……」

床に両手をつき、うちのめされて聞いているヤマモト。

里子「かわいい顔して、言うなあ」

和子「そこまで痛めつけたらんでも」

市子、美月を見ると、美月、違うところを見ている。

市子「美月？ どこ見てるん？」

美月「どこ見ようと勝手やる」

市子「……中二病」

美月「なんか言うた？」

○ 同・前

ぼうつとした顔でヤマモトが出てくる。

その後ろから出て来る市子たち。

ヤマモトを待ち受けた胃が、

胃「ほらな。わかっただろ？ 黙っていれば、いい女なんだけどな」

ヤマモト、うつとりして、

ヤマモト「ほんと、いい女だよな。俺が独り占めするのは、もったいない」

和子「うわ、立ち直り早っ」

胃「な、なんでウキウキしてるんだ？」

ヤマモト「俺たち、遠距離恋愛することになったんだ!!」

胃「はあ!？」

ヤマモト「ゆつくり愛を育もうと彼女は言ってくれた。さすが、悠久のときを生きる女はスケールが違う」

里子「そんなこと言うてた?」

市子「前向きに解釈したら、そうなる?」

和子「前向きすぎやろ」

ヤマモト「ガラス越しの儂い両想い! なんてロマンチック

なんだ……!!」

と浮かれたステップを踏みながら、去って行く。

胃「……それでいいのか……っっていうか、あのキャラ好きになれるのか……?」

あきれ顔でヤマモトを見送る胃。市子らを振り返り、

胃「お嬢さん方」

市子「ひゃっ」

里子「見つかった?」

胃「お気をつけて、お帰りください」

と言い残し、館内へ消える。

ぼわんと頬を赤らめ、見送る市子たち。

里子「お嬢さん、言われてしもた」

市子「あの胃から見たら、私ら年下やし」

里子「ちよっとドキドキしたわ」

市子「もしかして、占いにあった『ドキドキする出会い』っ



てこれのこと？」

和子「犬型埴輪がバラバラになったんも、ドキドキしたけどな」

市子「ああ、あの磁石でくつつくやつ？」

里子「それ言うなら、犬に追いかけられたんが、いっちゃんドキドキしたわ」

和子「埴輪やけどな」

市子「娘が入ってきたんも、ドキドキしたけどな」

と美月を見て、

市子「やっぱし博物館は白昼堂々入らんな」

美月「お母さん、ここって、年パスあったっけ？」

市子「年パス？」

和子「行き放題のチケット？」

里子「どうやる。食べ放題情報はチェックしてるけど……」

市子「あんた、そんなにこの博物館気に入ったん？」

美月「気に入ったどうか……出会ってしもた」

市子「え？ 出会ったて？」

美月「せやから……」

市子「もしかして、今の胄さん？」

美月「ちゃうわ。あんな若僧」

和子「わ、若僧て」

美月「もつとええ感じに枯れてる男前おったやろ」

市子「え？ 誰やろ？」

顔を見合わせるオバちゃん三人。

美月「……行基や」

市子「ああ、行基な」

里子「行基行基」

オバちゃん三人、わかったようにうなずいてから、

里子・和子・市子「ええつ」

と美月を見る。